

K-865

下小松地区農業集落排水事業に伴う

道伝遺跡緊急発掘調査報告書

第5次・第6次調査

平成9年3月

川西町教育委員会

序

「緑と愛と丘のあるまち」川西町は、山形県南部米沢盆地の一角に位置し、吾妻、飯豊、朝日、藏王の山々を望む美しい田園景観を残した人口2万人余りの町であります。町内には旧石器時代以来の人々の活動の痕跡が数多く確認され、とりわけ古墳時代には日本海側最大級の前方後方墳天神森古墳や17基の前方後円墳を含む下小松古墳群が築かれるなど歴史と文化の町であります。

道伝遺跡は、昭和の始めに「大川の柵」として認識されて以来、昭和54年には緊急発掘調査、翌55年からは3ヵ年にわたり重要遺跡確認調査が行なわれ、寛平8年の紀年銘のある木簡をはじめ多量の墨書き土器など重要な遺物が数多く出土しました。これらの調査の結果から、本遺跡は奈良時代末から平安時代にかけての置賜郡衙跡と推定されて現在に至っております。

これらの埋蔵文化財は、文字のない時代や文献資料の少ない時代の歴史や文化を知る重要な資料であり、これらを保護、保存していくことは、現代に生きる私たちの責務であると考えております。

今回の調査は、下小松地区農業集落排水事業に伴う緊急発掘調査であります。この調査の結果、これまで不確定であった道伝遺跡の北側について重要な所見を得ることができました。今後もこの重要な遺跡の解明と保護に向け努力していく所存であります。

最後になりましたが、調査中は地元の方々に多くの御不便をお掛けしながらも快く調査に御協力をいただきましたこと、心から厚くお礼申し上げます。

平成9年3月

川西町教育委員会

教育長 高橋 勉

例　　言

1、本報告書は川西町教育委員会が平成7年度と平成8年度に実施した、下小松地区農業集落排水事業に伴う道伝遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2、発掘調査は、昭和54年度の緊急発掘調査を第1次調査、昭和55年度から昭和57年度までの重要遺跡確認調査をそれぞれ第2次～第4次調査とし、今回の調査のうち平成7年度実施分を第5次調査、平成8年度実施分を第6次調査とした。

3、調査体制は次の通りである。(敬称略)

| | | | | |
|----------|-----------------|---------|-----------|---------|
| 調査主体者 | 川西町教育委員会 | 教　育　長 | 高　橋　勉 | |
| 発掘担当者 | 川西町教育委員会 | 文化遺跡係長 | 藤　田　宥　宣 | |
| 調　　査　員 | 川西町教育委員会 | 文化財専門員 | 斎　藤　敏　明 | |
| 調査参加者 | 佐　藤　雅　樹 | 石　田　智　宏 | 鈴　木　仙　助 | 村　山　邦　男 |
| | 長　沢　恵　美 | 長　沢　友　子 | 斎　藤　智　恵　子 | |
| 調査事務局 | 川西町教育委員会 | 社会教育課長 | 情　野　正　弘 | (平成7年度) |
| | | | 佐　藤　肇 | (平成8年度) |
| 調　　査　協　力 | 川西町文化財保護協会 | | | |
| | 株式会社殖産工務所 | | | |
| | 有　限　会　社　川　建 | | | |
| | 山　高　建　設　株　式　会　社 | | | |

4、本報告書の原稿は斎藤敏明が執筆し、写真撮影は藤田宥宣と斎藤が分担した。

5、本報告書に収録した出土遺物は川西町教育委員会に保管してある。

6、図版は遺構を1/80、遺物を1/3に統一した。

7、挿図中の方位は磁北を示す。

目 次

序

例 言

目 次

| | |
|-------------------|----|
| I、遺跡の地理的・歴史的環境 | 1 |
| II、調査に至るまでの経緯 | 1 |
| III、調査の方法と経過 | 3 |
| IV、調査の成果 | 4 |
| 1 第5次調査（平成6年度）の成果 | 4 |
| 2 第6次調査（平成7年度）の成果 | 5 |
| V、まとめ | 9 |
| VI、写真図版 | 13 |

挿 図 目 次

| | |
|-------------------------|---|
| 第1図 周辺の遺跡 | 2 |
| 第2図 調査区配置図 | 4 |
| 第3図 (95-)第3、第5調査区平面図断面図 | 5 |
| 第4図 (96-)第1、第3調査区平面図断面図 | 6 |
| 第5図 (96-)第2調査区平面図断面図 | 7 |
| 第6図 出土遺物実測図 | 8 |

I 遺跡の地理的、歴史的環境

山形県の南部、置賜地方は標高200～300メートルの沖積地とこれを包む吾妻、飯豊、朝日の2千メートル級の山岳及び奥羽脊梁山脈の山地からなる地域である。沖積地の中央には標高約300メートルの眺山丘陵が南北に連なり盆地の東西を区切り、東南側が米沢盆地、北西側が長井盆地となっており、合わせて置賜盆地と呼ぶ場合もある。

米沢盆地の中央には吾妻山系を源とする松川が北流し中小の河川と合流しながら、飯豊山系を源とする白川と合流し最上川となる。

道伝遺跡は米沢盆地の西縁、JR米坂線大川駅の北西150メートル程の肥沃な沖積地に存在する。この地は松川に合流する犬川左岸の底位河岸段丘上にあたり、標高約213メートルをはかる。地理的に置賜盆地のほぼ中央に位置する。

本遺跡の西の眺山丘陵には古墳時代中期～後期に盛期を持ち17基の前方後円墳を含む下小松古墳群（およそ200基）が展開するのをはじめ、丘陵端部には旧石器～古墳時代の遺跡が点在する。また、道伝遺跡の南およそ2kmの犬川右岸には東北地方で最古級の前方後方墳として知られる全長約75メートルの天神森古墳が存在する。

道伝遺跡は、これまでの4次にわたる調査により、建物跡や井戸跡の検出とともに多量の墨書き器や寛平8年の紀年銘を持つ木簡などが発見され、延喜式にみえる置賜郡衙跡と推定されている。

なお、奈良時代～平安時代における置賜地域の郡衙の位置については、この道伝遺跡の他に、米沢市大浦遺跡、南陽市郡山遺跡、高畠町小郡山付近に可能性が求められている。

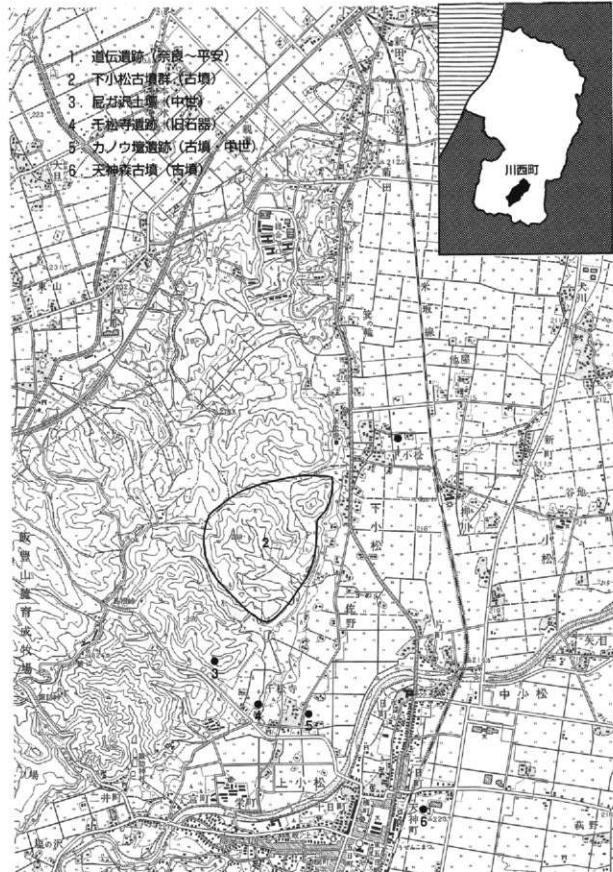
II 調査に至るまでの経緯

道伝遺跡は、山形県東置賜郡川西町大字下小松地内に所在する周知の遺跡である。昭和54年に緊急発掘調査、昭和55年から昭和57年の3ヵ年に重要遺跡確認調査が行なわれている。これらの調査では、建物跡や井戸跡、多量の墨書き器や木簡等が確認され、以上の結果から本遺跡は奈良時代末期から平安時代にかけての置賜郡衙跡と推定されている。

今回の調査は平成6年度より始まった下小松地区農業集落排水事業に伴う緊急発掘調査である。調査に至るまでの経緯は以下の通りである。

平成7年1月に集落排水事業担当部局である川西町農林課より工事施工箇所における埋蔵文化財についての協議申請があり、協議の結果、平成7年度と平成8年度に工事を実施する約840m²（平成7年度は約400m²）の範囲について発掘調査を行なうことで合意した。

その後平成7年10月19日付け文書にて埋蔵文化財発掘調査の通知を行い、平成7年度分を第5次調査として平成7年11月13日より12月8日まで、また平成8年度分を第6次調査として、平成



第1図 周辺の遺跡 ($S=1/25,000$)

8年5月24日から平成8年7月1日まで行なった。整理作業は平成9年3月17日より平成9年3月31日までである。

III 調査の方法と経過

今回の調査は集落排水事業に伴うことから調査範囲が狭長なものとなったため、結果的にトレント状の調査区を第5次調査では7箇所、第6次調査では4箇所設定し、線状で遺構を確認することに努め、調査範囲内においての遺跡の限界を知ることを目的とした。また調査範囲の現況が生活道路であることから、調査は各調査区ごとに全工程を終了させ、次の調査区に移行する方法を採った。表土除去作業についてはバックホーを用い、遺構の確認と掘り下げは入力で行なった。

第5次調査

平成7年 11月13日 調査着手。機材搬入。
14日 基準杭の設定。
16日～ 遺構確認。遺物出土。
12月8日 撤収。調査終了。

第6次調査

平成8年 5月24日 調査着手。機材搬入。基準杭の設定。
30日～ 遺構確認。
6月3日～ 遺物出土。
7月1日 撤収。調査終了。

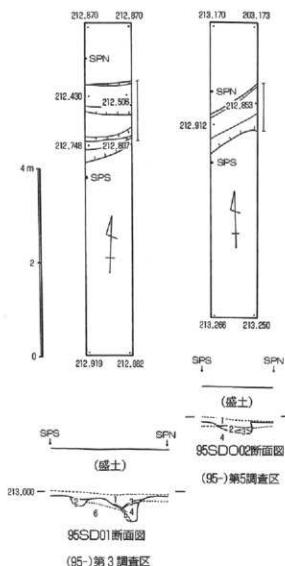
IV 調査の成果

1、第5次調査(平成7年度の調査)の成果

第5次調査は遺跡の中央南側について7箇所のトレンチ状の調査区を設け、計70.4m²の精査を行なった。調査区は北から順に(95-)第1調査区～(95-)第7調査区とした。このうち遺構が確認されたのは第3調査区と第5調査区の2箇所である。ともに遺構の性格を判断する資料の検出には至っていない。

第3調査区 (7.0m²)

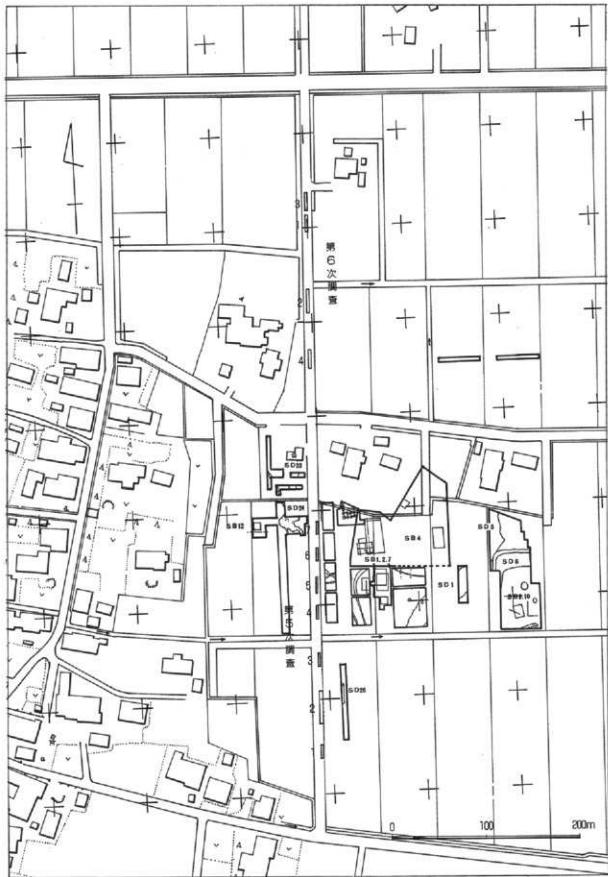
第3調査区では東西に走る溝跡(95S D01)が1条検出された。溝跡の断面は両端が深く中央部がごく浅いW字型の構造をしている。掘り込み面からの深さは北側で約50cm、南側で約20cmで、立ち上がりは外側が急で内側がやや緩い。溝幅は約1.5mである。覆土は自然堆積とみられ遺物は確認されていない。



第5調査区 (6.1m²)

第5調査区では南西～北東に走る溝跡(95S D02)が1条検出された。幅約80cm掘り込み面からの深さ約35cmで、立ち上がりは北側でやや内に食い込んでおり、南側ではごく緩やかである。覆土は自然堆積と見られ、遺物は土師器片2点と須恵器片1点であるがいずれも小片であり詳細は不明である。

第3図 (95-) 第3調査区・第5調査区 平面図断面図 (S=1/80)



第2図 調査区配置図 (S=1/2,000)

2、第6次調査(平成8年度の調査)の成果

第6次調査は遺跡の中央北側について4箇所のトレンチ状の調査区を設け、計50.4m²の精査を行なった。調査区は北から順に(96-)第1調査区～(96-)第4調査区とした。第4調査区を除く3箇所の調査区で造構が確認され、このうち第2調査区で奈良時代末のものと思われる溝跡が検出された。

第1調査区 (10.56m²)

第1調査区では溝跡1条(96S D01)

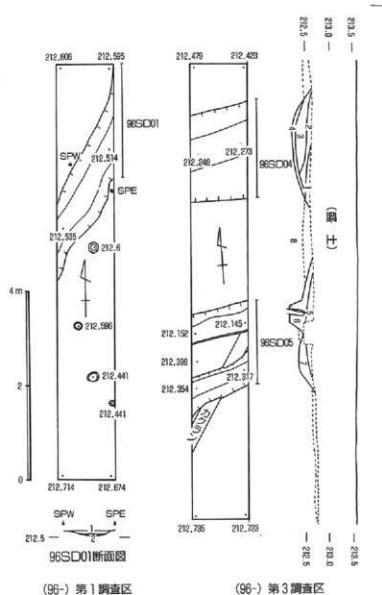
と4箇所のピットが確認された。

96S D01は確認面での幅約1m、深さ約12cmの小規模の溝で、2層に分けることができ、下層はよく締まった砂層である。遺物は認められていない。付近にはかつて水路があったことが判っており、ごく新しい造構と思われる。

ピットはいずれも径20cm内外で深さ10cm～20cmである。

第3調査区 (11.52m²)

第3調査区では溝跡2条(96D 04、96S D05)が確認された。ともに覆土に地山の土をマーブル状に含んでおり、ごく新しい溝と考えられる。遺物の出土は認められていない。



第4図 (96-) 第1調査区・第3調査区 平面図・断面図 (S=1/80)

第2調査区 (15.84m²)

第2調査区では溝跡2条(96S D02、96S D03)が確認された。

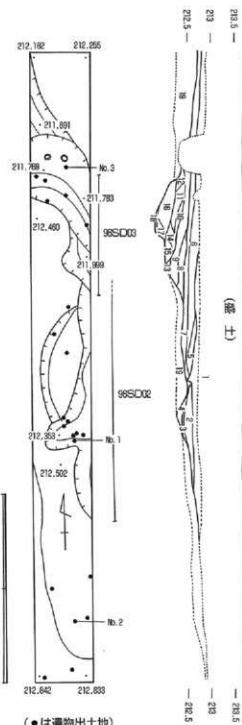
この調査区では確認面とした灰白色土層の上面が96S D03の南で南北から北東に向かって緩やかに傾斜しており、この中で96S D02と96S D03がやや深い箇所を形成している。

96S D02はこの傾斜に沿った溝跡で一部が西に突出している。この突出している部分は深さが約50cmあり、土師器と須恵器が数片まとめて出土している。「大十」の墨書きを持つ須恵器壺もこの位置からの出土である。また、緩傾斜面にも遺物が散在しており、土師器、須恵器のほか砥石に使われたとみられる石材も出土している。

96S D03はS D02よりも古い時期の箱堀状を呈する溝で、立ち上がりはより明確である。幅は広いところ1.2m掘り込み面からの深さは0.8mである。底は西から南東へ向かう字状に折れている。溝内からは多量の木材が確認されているほか、数片の土器も混入している。この溝の斜面に径15cm、深さ10～15cm程の小ピットが2箇所確認されているが溝との関係は不明である。造構の覆土はとともに自然堆積と見られる。また、これらの傾斜する範囲を造構として捉えられる可能性がある。

遺物

墨書き土器(No.1) 96S D02の暗灰白色土層出土。口径12.6cm、底径5.8cm、高さ4.0cmの須恵器壺。ロクロ整形で



第5図 (96-) 第2調査区 平面図・断面図 (S=1/80)

底は回転ヘラ切り技法により切り離されている。底部外面に「大十」と思われる墨書き認められる。残存率90%。

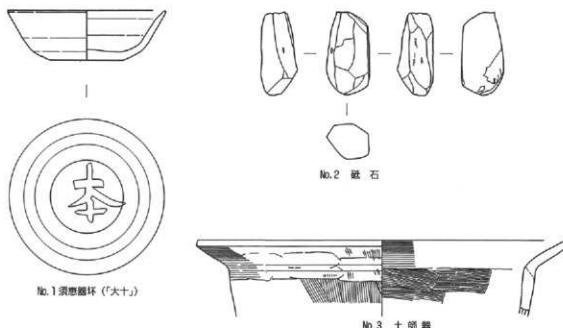
砥石（No 2） 96 S D 02出土。長さ6.6cm、幅3.4cm、重さ75.8の泥岩。断面は不整六角形を呈し、このうち3面に擦痕が残るほかは剥落している。

土師器甕（No 3） 96 S D 03出土。口縁部破片が円周の約20%残る。復元口径30cm、外表面は7本／1cmの刷毛によるタテハケのち口縁部のみナデ、内表面は口縁部ナデで体部内面は11本／1cmのヨコハケである。道伝遺跡S D 35 F 12出土長胴甕や米沢市大浦B遺跡出土長胴甕と同様の特徴を持ち、大浦編年の二期（8世紀中葉～8世紀末葉）に比定される。

（参考文献）

『道伝遺跡』 川西町教育委員会 1984

『大浦B遺跡発掘調査報告書』 米沢市教育委員会 1933



第6図 (96-) 第2調査区 出土遺物 (S=1/3)

V まとめ

第5次、第6次の調査でえられた所見は、以下の2点である。

第一点は、第5次調査において、これまでの調査から推定されていた大溝の位置について再考をはかる必要が生じたことである。第5次調査の第6調査区は遺跡の範囲を画すると考えられる大溝の推定線上に設定したものであるが、ここでは大溝に該当するような遺構の確認には至らず、課題を残すことになった。

第二点目は、第6次調査において、これまでの調査でもっとも北の位置で奈良時代末～平安時代の本遺跡が栄えた時期の溝跡が確認できた点である。遺物が大溝のF 12という遺跡のなかでは最も古い時期に堆積した土層より出土したものと同時期と考えられることも本遺跡の形成過程を知るうえで重要な示唆を与えるものとなった。

第5次調査、第6次調査ともに準備の不十分さにより万全の調査ができなかったことは反省すべき点であり、調査範囲内で遺跡の範囲を押さええるという当初の目的についても、南側で課題を残してしまった。今後第7次調査の必要が生じた場合には万全の体制をもって調査に望みたい。

報 告 書 抄 錄

| ふりがな | | | | | | | |
|----------------|--|------------|-------------|------------------|--|----------------------------------|--|
| 書名 | 遺伝遺跡発掘調査報告書 | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | |
| 巻名 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 川西町埋蔵文化財 調査報告書 | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第15集 | | | | | | |
| 編著者名 | 藤田宥宣 斎藤敏明 | | | | | | |
| 編集機関 | 川西町教育委員会 | | | | | | |
| 所在地 | 〒999-01 山形県東置賜郡川西町大字上小松1736-2 0238-42-2111 | | | | | | |
| 発行年月日 | 平成9年3月31日 | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード 市町村 | 北緯 遺跡番号 | 東經 度分秒 | 調査期間 | 調査面積 (m ²) | 調査原因 |
| どうでんいき 遺伝遺跡 | 川西町大字 下小松字道伝 | 06382 | 140° 02' | 38° 00' | 1996.11.13 1996.12.08 1996.05.24 1996.07.01 | 第5次調査 第5次調査 第6次調査 第6次調査 | 農業集落 排水事業 70.4m ² 50.4m ² |
| 所収遺跡名 | 種類 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | | |
| 遺伝遺跡 | | 奈良・平安 | 溝跡・ピット | 土師器 須恵器 砥石 | | | |

VI 写 真 図 版



調査前全景



95・第1調査区発掘（北より）



95・第2調査区発掘（北より）



95・第4調査区発掘（北より）



95・第6調査区発掘（北より）



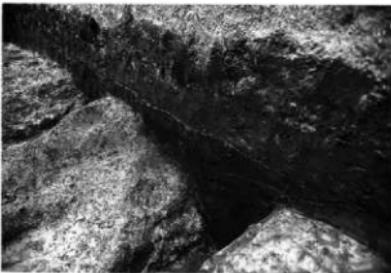
95・第3調査区プラン確認（南より）



95 S D 01 プラン確認



95 S D 01 完掘



95 S D 01 セクション（北東より）



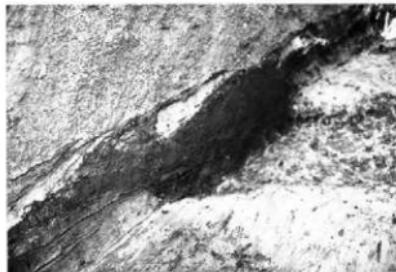
95・第5調査区プラン確認（南より）



95 S D 02プラン確認



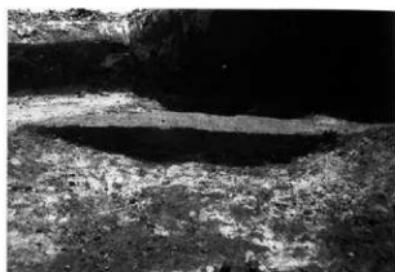
95 S D 02実探



95 S D 02セクション（南東より）



96・第1調査区全景（南より）



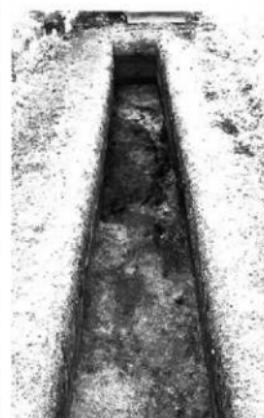
96S D01セクション（南より）



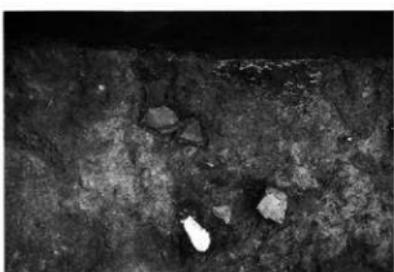
96・第2調査区全景（南より）



96・第2調査区南半完掘（北より）



96・第2調査区北半完掘（南より）



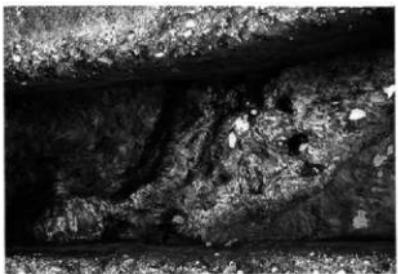
96・第2調査区遺物出土状況（砾石）



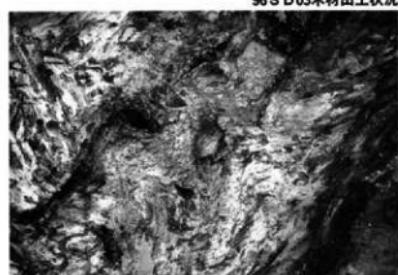
96・第2調査区遺物出土状況（磁器土器）



96 S D 03木材出土状況



96 S D 03完掘



96 S D 03遺物出土状況



96 S D 03セクション（南西より）



96 - 第3調査区全景（南より）



96 S D 04セクション（南西より）



96 - 第3調査区完掘（南より）



96 S D 05セクション（西より）



96・第4調査区完掘（北より）



調査風景



96・第2調査区出土遺物